

# 第一章

## 「市長の計画」

・・・みこころが天で行われるように地でも行われますように。

マタイ 6 : 10

### 1 旅の始まり

～私の旅～

私には神から与えられた情熱があります。それは、(特に地域教会として現された) キリストの身体が、神に与えられた偉大な存在目的を知り、それを果たしていくことです。私がどのようにしてこの情熱に辿り着いたかをこれからお話します。それは、象徴的にも文字通りにも、二つの意味で私の「旅の証」です。これを読むとき、あなたは何故、私が世界のどこにいても人々に「もしイエス様が市長だったら」どうなるか考えるようにチャレンジしているのかを理解していただけるでしょう。

教会に対する私の情熱が、その頭であるキリストご自身を知りたいという情熱を上回らないように、私はいつも気をつけています。ピリピの教会に対して使徒パウロが証したように、他の何のものにも勝って、キリストご自身を知ることを私は求めます。何らかの情熱を胸に保っている人は、働きそのものを、働きを与えるお方(キリスト)以上に大切にしてしまうという危険性と隣り合わせです。私たちがキリスト以外の何かに焦点を当ててしまうとき、私たちの働きは薄れてしまうのです。収穫のための力は、私たちの頑張りから来るのではなく、私たちに働きを与えてくださるお方から来るのです。主よ、どうか私たちが、あなたご自身を第一に求めますように！

私の父は伝道者でした。私が15歳になるまで、父はロサンゼルス労働者居住地区にある家庭的なバプテスト教会で牧師をしていました。ロサンゼルスの聖書学校(現在のバイオラ大学)で学んでいるとき、神は両親の心に世界宣教への情熱を与えられました。両親は自らアフリカへの宣教師になる準備をしていましたが、神は他の人々を訓練し、送り出すという形で世界宣教に加わるよう両親を導かれました。

そのバプテスト教会の洗礼層の壁にかけてあった次の言葉は、いまでも私の心に深く刻まれています。「生まれてからまだ一度も福音を聞いたことがない人々が大勢いる一方で、福音を何度も繰り返し聞く人がいるのは、良いことなのだろうか？」私の家族と教会は宣教師を支援しており、私の家には宣教師たちがよく立ち寄りました。彼らは私のヒーローです。「私もいつか宣教師になりたい」そう思っていました。

私が15歳のとき、父はアリゾナバプテスト同盟の議長になりました。父のビジョンは教会を開拓することでした。25年間に渡る父の奉仕の結果、100以上の教会が開拓されました。「世界宣教と教会開拓の情熱」というすばらしい霊的遺産を私は受け継ぎました。しかしその後の青年時代の経験から、私は複雑な問題に直面することになって行ったのです。

青年時代、私は国際協力隊員（Peace Corps）として、アフリカのマラウイで中学生たちの教師をしました。私の赴任地は、少年のころに宣教師たちからよく聞かされてきたような宣教基地の近くにある学校でした。基地は宣教師たちの残した功績でした。その学校は学業において、国内で最も高いレベルにある学校のひとつでしたし、経営はうまく行き、効果的に運営されていました。そこにいる宣教師たちは、生徒たちに愛を示し、福音を伝えたいという情熱を持っていました。私もまた、自分の生徒たちがイエス様との個人的な関係に導かれることを心から願い、宣教師たち主催の「生徒たちのためにとりなす早天祈祷会」に出席していました。

しかしながら、中には福音に背を向ける生徒たちもいました。その生徒たちは、良くも悪くも、宣教師たちの行動に見え隠れする、「我々は、アフリカ人の改宗のために奉仕している」というメッセージを感じ取っていました。文化的な侵略主義のようなものを感じ、宣教師たちが彼らを心から愛していたのにもかかわらず、宣教師たちが持ち込んだ文化と信仰を拒絶していたのでした。この経験を通して、私の「宣教」への召しの確信は失われなかったものの、文化を超えた伝道（海外宣教）に対しては懐疑的になっていきました。

国際協力隊としての奉仕が終わると、宣教というものは何か、そしてその中で私の役割は何かということを探求する、二年間にわたる私の「心の旅」が始まりました。私はバイクに跨って赤道直下のアフリカのほとんどすべての国々を巡り、多くの宣教師たちと時間を過ごしました。この旅の途中、私は生涯の友となる二人のアフリカ人の兄弟に出会いました。彼らは現在それぞれの国においてキリスト教会の指導者的な存在になっています。

私は中東をヒッチハイクし、途中イスラエルで大学の修士課程を修了しました。次に私は、ベルギーで2気筒のシトロエン社の中古車を購入しました。インドまで運転したとき、その車は遂に走り過ぎて壊れました。放浪の旅の最後の部分で私は、飛行機で東南アジアの9つの国々を訪れました。私は福音を広げるということにおいて、何が機能し、何が機能しないのかをどうしても知りたかったのです。旅路の果てにたどり着いた私の結論は、「文化を超えた海外宣教には意味がある」ということでした。ただし条件があります。宣教師たちが高い身分や支配階級であるかのようにふるまうのではなく、現地の教会の兄弟、しもべとして奉仕した場合において、その本来の意義が最大限に達成される、ということです。私は自分が宣教に召されていることを確信しました。帰国するとすぐに、私はデンバーの神学校に入学し、宣教学を専攻しました。そ

ここで、自分の教会に対する見方を大きく変えるような困難な現実に関直面することになるとは、そのときは知るすべもありませんでした。

神学校のカリキュラムには、地域の伝道への参加実習が組み込まれていました。そこで私は、犯罪を引き起こしてしまった十代の若者たち（黒人やヒスパニック系を中心とする）にカウンセリングの機会を提供する、というプログラムを立案し、組織しました。キリスト教団体だということ公言していたにも関わらず、裁判所は喜んで私たちにその若者たちと面会させてくれました。プログラムに参加するクリスチャンたちは、若者たちに友情、愛情を注ぐだけでなく、にキリストにある信仰についても分かち合うことができるのです。黄金律と大宣教命令の完璧な組み合わせではありませんか！神学校の学長は地域の教会に手紙を書いてくれました。私は沢山の教会の、大勢の人々の前で証をし、プログラムをアピールしました。ところがどういうわけか、思ったような反応は得られませんでした。人々は当時の社会情勢（人種間の緊張）から、恐れを抱いてしまったのかもしれませんが。しかし幸運なことに、神学校の友達は私に協力してくれました。10名の神学生が、犯罪を起こしてしまった十代の若者たちの更生のため、一対一の関係を開始しました。良い結果が生まれました。裁判所は、私たちにもっと多くの青少年たちを紹介したいと言って来ました。私たちは地域教会のクリスチャンの方々に、心の底から協力して欲しいと再びお願いしましたが、ほとんど応答はありませんでした。本当は気が進まなかったのですが、必要が非常に大きかったので、ボランティアしたいと申し出てきたクリスチャンではない大学生たちにもお願いする他ありませんでした。私は、自分が誇りに思ってきた「教会」というものに対し、心の底から失望しました。私は、愛について語りながら、神の愛に一度も触れたことのない傷ついた若者たちに手を差し伸べることには尻込みするような人々と付き合いたくはない、と思いました。私は神を愛していましたが、教会に怒りを抱くようになってしまいました。それも、強い怒りを。

そのような怒りと葛藤の中、神は私に語られました。御言葉と祈りを通して、神は私に言われました。「ボブ、これが私の教会だ。私の花嫁なのだ。たとえどんな状態だったとしても、私は私の花嫁を愛している。私の命を与えるほどまでに。私が愛しているのと同じようにあなたが私の花嫁を愛するようになるまでは、教会が私の願う姿に近づくために、あなたを用いることはできない。」

私は、短刀を胸に突き立てられたように感じました。「神様、」私は告白しました。「私を赦してください。あなたの愛を私の心に満たしてくださらなければ、私はあなたの教会を愛することが出来ません。でも私はそれをしてと思っています。」主はその祈りに答えてくださいました。不完全で傷ついた姿にも関わらず、今日も私は教会を愛しています。そして教会の癒しと回復に貢献したいという情熱に私は満たされています。私は宣教に召されたのでしょうか？そのとおりです！私の宣教の働きは、教会がその役割を存分に果たせるよう、教会にお仕えすることです。

ほどなく私はフード・フォー・ザ・ハングリー・インターナショナルに加わり、そのボランティアプログラムを立案し、指導する仕事をしました。その後、神は次のドアを開いてくださいました。それは開発途上国の教会に対する働きでした。

## 私たちの旅

1981年、私はハーベストという団体を立ち上げました。当初、ハーベストは開発途上国に住むクリスチャンと北米のクリスチャンの橋渡しをしていました。私たちは相互の教会同士を結び付け、多くの協力関係を作り上げて行きました。私たちはまた、クリスチャンの団体同士も結び付けました—例えば、ドミニカのデイケア施設と合衆国の幼稚園、ドミニカの麻薬中毒患者の施設と合衆国の看護学校、ハイチの農業組合と合衆国の家族、などです。それらのパートナーシップの目的は、物質的に豊かでない国々のクリスチャンがその地域に見える形で神の愛を現すのを励まし助けることでした。多くの素晴らしいプロジェクトが計画されました。しかし、そこで私たちが目にしたのは、善意の献金の主導権を巡って争いをしている貧しい国々の教会リーダーたちの姿でした。一部の開発途上国には、金銭の主導権の問題のゆえに分裂し、破綻してしまう教会もありました。私たちはまた、私たちがパートナーシップを組んだ現地のクリスチャン団体が、外部からの経済支援なしには大きなプロジェクトを維持できない、という現状を見ました。それは私たちの目指したものと違っていました！

1986年、ハーベストの役員とスタッフはひざまずき、神の導きを求めました。神は答えてくださいました。私たちの焦点は、クリスチャン団体ではなく地域教会に絞るべきこと、また外部からの経済支援によって運営されているプロジェクトから撤退することであると示されたのです。私たちは、現地の地域教会のリーダーと会衆に、「信仰を言葉と行いで現していく」という聖書が教える責務について教え、訓練しはじめました。外部に依存することなく、自分たちが持っている資源を用いて。

その働きは、中南米にある5つの教会から始まりました。結果は目を見張るものでした。現地の教会は、彼らの実践を神が何倍にも増やして用いてくださる、ということを目の当たりにしました。神の愛の実践を通して、以前は教会に関心がなかった地域の人々が、キリストを信じる信仰へと導かれました。教会は成長し、地域社会に物心両面のインパクトを与え始めました。ユース・ウィズ・ミッション（YWAM）という団体が私たちに、地域開発を専攻する学生を訓練して欲しい、と申し出てくれました。また1997年に、ハーベストは非公式的にフード・フォー・ザ・ハングリー・インターナショナルと協働して働きを始めました。このような協働関係によって、私たちは40以上の国の教会と宣教団体を訓練し、「聖書的全人宣教」というビジョンと戦略を分かち合う道が開かれました。私たちの訓練カリキュラムは20以上の言語に翻訳されました。15の国々で、全人宣教を推進し励ますための現地の団体が起こされました。神がそれをなしてくださいました。その御業を傍らで見守るのは、本当に素晴らしい体験でした。

## 私たちの成長

御自身の教会に対する神の御心は変わりません。しかし神の用意された道を進んで行く中で、その御心に対する私の理解は変化していきました。私たちがフード・フォー・ザ・ハングリー・インターナショナルと協力関係を結ぶことで、広げられたのは私たちの働きの機会だけではありません。働きに対する私たちの理解も広げられました！私たちは、教会がただ置かれた地域だけにインパクトを与えるだけでなく、置かれた国を弟子とするように召されていることを理解するようになっていったのです。また私たちは、もし国を弟子とすることを目指し、イエス様が市長であったらなさるように、地域社会に仕えようと願うなら、聖書的世界観が不可欠であるということにも気付かされました。世界観とは、「世界というものに対して、また世界がどのようなルールで動いているかということに対して、人々が持っている一連の前提（世界を見るメガネ）」ということが出来ると思います。聖書的世界観によると、私たちは例外なく傷つき崩壊した人類の一員です。神の介入なしには、私たちには希望がありません。しかし、神の良き知らせは、全人類には希望があるということです！これが、私たちが持っている世界観です。

・・・それでは、市長にお会いしましょう。